

中学校及び高等学校外国語科において 生徒の学習意欲を高める教師の手立ての提案

研究開発課 指導主事 田中 京子

【要旨】 文部科学省令和4年度英語教育実施状況調査概要によると、中学校及び高等学校の生徒の英語力向上に影響を与えているものの中に、「生徒の言語活動の割合」及び「英語教師の英語力や発話の割合」が挙げられており、「生徒の英語による言語活動を増やすこと、言語活動の取組でICTやALTを効果的に活用すること、教師が英語力を高め授業で積極的に英語を使用することなどが、生徒の英語力の向上に必要」と分析されている。本稿では教師の積極的な英語使用に焦点を当て、中学校及び高等学校外国語科において生徒の学習意欲を高める教師の手立てを提案する。

【キーワード】 教師の英語使用, 学習意欲, Instruction Checking Questions, Think-Pair-Share, Concept Checking Questions, フィードバック

1 はじめに

文部科学省令和4年度英語教育実施状況調査概要において、生徒の英語力向上に影響を与えているものの中に、「生徒の言語活動の割合」と「英語教師の英語力や発話の割合」が挙げられており、「CEFR B1（英検2級）レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が高い高等学校では、ICTを活用した言語活動やALTによる授業外の活動を行っている学校が高い割合でみられた。」（※1）と示されている。そして、「生徒の英語による言語活動を増やすこと、言語活動の取組でICTやALTを効果的に活用すること、教師が英語力を高め授業で積極的に英語を使用することなどが、生徒の英語力の向上に必要」（※2）と分析している。このように生徒の英語力向上には複数の手立てがあるが、本稿では教師の積極的な英語使用に焦点を当てることとした。

教師の積極的な英語使用は、授業で扱う内容に関わらず全ての英語の授業において共通する教師の態度である。中学校学習指導要領外国語科（平成29年告示）（以下、中学校学習指導要領と略記）及び高等学校学習指導要領外国語科（平成30年告示）（以下、高等学校学習指導要領と略記）において、「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。」（※3）（※4）と明記されている。しかし、

同調査によると、教師の英語使用状況について英語担当教師の発話の半分以上が英語である割合は、中学校では74.4%、高等学校では、英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科では81.1%であったものの、普通科では47.0%、その他の専門学科及び総合学科では40.8%であり、全体では46.1%にとどまっている（※5）。この結果を受け、中学校及び高等学校外国語科における教師の英語使用状況を改善し、教師が積極的、効果的に英語を使用することで授業が実際のコミュニケーションの場となる手立てについて考察するとともに、この考察を基に、教師が取り組む手立てを動画にまとめることとした。

2 教師の英語使用状況を改善するための手立てを考えるに当たって

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編（以下、中学校解説と略記）（※6）及び高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説外国語編（以下、高等学校解説と略記）（※7）において指摘されているように、生徒が日常生活で英語に触れる機会は非常に限られている。しかし、白井（2012）は、「教師も生徒も英語を基本的コミュニケーションの手段として使うことにより、頭の中で英語がactivate（活性化）されるという状況を作っていかなければ、いつまでたっても使える英語は身に付かない」（※8）と述

べている。このことから、授業中に教師が英語を使用するだけでなく、教師の英語使用を受け、生徒がそれまでに学んだ英語の知識や技能を使って思考・判断・表現したり、生徒同士が英語を使用したりする機会を多く設定することが必要である。その際、中学校学習指導要領及び高等学校学習指導要領にあるように、教師の英語使用が「生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること」(※9)(※10)(注1)や、ブリティッシュ・カウンシルが指摘するように、教師が話す英語の質に意識が向けられることは重要である(※11)。

また、平成28年12月21日公表の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」において、「指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況」(※12)が指摘された。しかし、Dörnyei(2001)によると、「ほとんどの場合、十分な動機づけを有する学習者は、言語適性やその他の認知特性に関係なく、第二言語の実用的な知識を習得できる」(※13)とし、Gardner(1985)も言語学習において、「教師がその言語に堪能で生徒の気持ちに寄り添い、教授法が興味深く有益なものであれば、生徒の学びに対する最初の姿勢が肯定的か否定的かに関係なく、肯定的な姿勢につながる可能性がある」(※14)としていることから、教師は生徒の心理的側面を意識した学習意欲を高める働きかけを生徒に行うことが大切であり、このような働きかけを生徒に行うことで学習意欲の向上やそれに伴った英語力向上も期待できる。

3 外国語を学ぶ上での心理的側面に着目する

生徒の学習意欲が向上するためには、マーサー・ドルニエイ(2020)が挙げる次の促進的マインドセットのための5つの原則を生徒に育むことが有効であるとしている(※15)。その原則について一部説明する。

促進的マインドセットのための5つの原則

- ①有能感を高める
- ②成長マインドセットを育む
- ③学習者の当事者意識と自己統制感を高める
- ④積極性を育てる
- ⑤粘り強さを育てる

①有能感を高める

学習者自身が「やればできる」という信念を持つことであり、学習者が自分の努力で獲得した成功体験を得ることが有能感を高めるために最も効果的な方法であるとしている(※16)。

②成長マインドセットを育む

成長マインドセットとは、Dweck(2017)による「人の基本的な資質とは、自身の努力、ストラテジー、そして他人からの助けによって養うことができるものであるという信念」(※17)である。マインドセットを育てるためには、子どもたちが用いた一連の過程、つまりストラテジーや努力、決断に焦点を当てて褒めることである(※18)。

③学習者の当事者意識と自己統制感を高める

人は何かを所有しているとき、その所有物に対して強い感情を持つ傾向があるため、その対象に対しての行動なども大きく変化する(※19)。言語教育に関しても、教師は学習者が自分の学びや学んでいる言語自体に対して当事者意識をもつことを望んでいるとマーサー・ドルニエイ(2020)は述べている(※20)。

④積極性を育てる

積極的な学習者の特徴を次に示す(※21)。

積極的な学習者の特徴

- 常に関心を持っている傾向がある
- 学びに対してオープンである傾向がある
- 率先して発言する傾向がある
- 他人との関係を意欲的に築く傾向がある
- 自ら行動を起こす
- 自己統制する
- 物事を実現させていく

この積極性は単なる性格的特徴ではなく、環境次第であり、自分が支持されていると感じることや安心感は、人が積極的であるためには必須であるとしている(※22)。

⑤粘り強さを育てる

外国語の習得には時間を要し、教師は学習者がこの長期戦に耐えることができる準備を

させなければならない(※23)。マーサー・ドルニエイ(2020)は、ダックワース(2016)によってグリット(grit・粘り強さ)という概念と教育におけるその価値が広く知られることとなり、このグリットが言語学習において育まれる必要があると述べている(※24)。ダックワース(2016)は、才能、努力、スキル、達成についての方程式を示している(※25)(図1)。



図1 才能、努力、スキル、達成についての方程式

この方程式は、「努力」によって「スキル」が培われ、「努力」によってスキルが生産的になることを表している(※26)。また、粘り強さは伸ばすことができ、親や教師など、周りの人々が粘り強さを伸ばすために重要な役割を果たすとしている(※27)。

これら5つの原則は互いに関連し合っているとマーサー・ドルニエイ(2020)は述べている(※28)。

また、これまで述べてきた5つの原則は生徒に育み、高めたい点であるが、教師は生徒との信頼関係を築くことや生徒が安心して授業に臨んだり、英語の学習を進めたりすることができる環境を確保することも必要である。

ハッティ・イエーツ(2020)は、生徒は改善点を知りたいのであって、個人的に傷つけられるように感じる批判は望んでおらず、批判される環境に対して敏感であると述べている(※29)。また、Dörnyei(2001)も、10代の学習者について論じる中で、「生徒たちは目的やアイデンティティを探し求める中で、もし言語教室が、自尊心が守られ、自信を得ることができる安全な場所であると実感することができれば、非常に前向きな態度で反応する可能性がある。」(※30)と述べ、成功体験を提供すること、学習者を励ますこと、言語不安を軽減すること、そして学習ストラテジーを教えることが、学習者に必要な自信をつけさせるために教師ができることであるとしている(※31)。

上記の5つの原則を英語の授業で生徒に育

み高め、また、生徒が安心して授業に臨んだり、英語の学習を進める環境を確保したりすることができる場面を次のように考察した。

例えば、教師が生徒の理解の程度に応じた英語を選択し使用する機会を多くもつことで、生徒が「わかった」と実感する機会も増え、生徒の有能感を高めることにつながり得る。このとき、教師の英語使用において、発話量という点だけでなく、話し方、スピードなどにも配慮が必要であるとともに、ジェスチャーや視覚的な支援も有効に働くであろう。生徒の成長マインドセットや積極性を育み、当事者意識と自己統制感を高めるために、生徒に与えるフィードバックを工夫したい。フィードバックが効果的になるためには、教師は日頃から生徒をよく観察し、生徒と対話することで生徒の学びを把握することが必要である。フィードバックの内容は様々あるが、例えば、今後さらに良くなるための改善点を伝えることが考えられる。フィードバックで生徒に改善点を伝えるということは、生徒が学びをコントロールする方法を知ることになり、当事者意識につながる。また、教師から改善点について言及するだけでなく、生徒自身が改善点を考えることを促せば、当事者意識をより高めることに結びつく。併せて、生徒のそれまでの工夫や努力について言及することも生徒の成長マインドセットを育てるために忘れてはならない。そして、Dörnyei(2001)は、「信頼していることや励ましを伝えることで、フィードバックは生徒に肯定的な自己概念や自信を促すことができる。」(※32)と述べていることから、信頼の気持ちや励ましもフィードバックに加えたい。このような教師からのフィードバックを生徒に提供することができれば、生徒は教師に支持されていると感じることができ、生徒の積極性が育まれることにつながる。

4 生徒が学習意欲を高め、授業で英語を活用するためのテクニック

教師は、外国語を学ぶ上での心理的側面を考慮し、生徒の学習意欲を高めるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場とする必要がある。その方法として、次の3つのテクニックが有効である。

● Instruction Checking Questions (ICQs)

- Concept Checking Questions (CCQs)
- Think-Pair-Share

ブリティッシュ・カウンシルによると、Instruction Checking Questions（以下、ICQsと略記）とは、ポイントを絞った簡潔な質問（What's the first～?, How many～? など）を指示や説明の後に行い、重要な点を確認する方法であり、ICQsを活用することにより、教師は生徒の理解度合いを確認するだけでなく、英語を使い続けることもできるとしている。また、Concept Checking Questions（以下、CCQsと略記）はICQsと似たもので、内容面を理解しているかどうかを確認するための質問である（※33）。ICQsやCCQsを活用することは、耳に入って来る英語やそのやり取りがリアルタイムで思考、判断、表現する機会となる。ここで教師が生徒の理解の程度に応じた英語を用いることで、生徒の「わかった」という実感や有能感につながることを期待される。

Anderson (2016) は、Think-Pair-Shareを次のように説明している。

クラス全体の指導において、読解やリスニングの文章の理解や新しい語彙や文法概念の理解を確認する際に役立つ可能性がある。手順は教師が生徒に質問を投げかけた後、生徒は数秒間静かに考え、次に、ペアで質問に対する解答を話し合う。その後、教師はクラス全体と解答を共有するために生徒を選ぶ。このストラテジーにより、「待ち時間」を与え、生徒が答える前にアイデアを考えさせたりペアの相手と比較させたりすることになる。この「待ち時間」により、英語に苦手意識のある生徒の解答しようとする意欲や正しい解答に近づく可能性も高まることを期待され、英語で話し合うことを促せば、スピーキングの練習にもなる（※34）。

このことから、教師が英語で質問し、生徒が英語で答える場合、Think-Pair-Shareを活用することで、一人の生徒が答えるよりも多くの生徒が英語で答える機会となる。そのため、生徒が英語を使う機会を増やすために、教師が意図的にThink-Pair-Shareを活用することが望まれる。また、授業を進めていく上でも、ペアでの話し合い中に生徒の様子を観察することで、生徒がどれくらい質問や課題を理解しているかを確かめたり、共有場面で参考になる意見などを拾い上げたりす

ることができ、その後の授業展開にも有益である。

5 中学校及び高等学校外国語科の授業において、生徒の学習意欲を高めるための手立てを紹介する動画

今回、中学校及び高等学校外国語科教員を対象とし、これまで述べてきた心理的側面に配慮することや学習意欲を高めるテクニックを取り入れた、教師が取り組む手立てを提案する動画を作成し、和歌山県教育センター学びの丘ウェブページ上で公開することにした。内容は次のとおりである。

- (1) Planning English Use
- (2) Instruction Checking Questions (ICQs)
- (3) Think-Pair-Share
- (4) Concept Checking Questions (CCQs)
- (5) Feedback

(1) Planning English Use

このテーマでは、日本人教師（以下、JTEと略記）のみの場面と、JTEと外国語指導助手（以下、ALTと略記）がともに授業を行う場面を設定した。

JTEのみの例は、JTEが授業がクラスルームイングリッシュを使用している場面である。中学校及び高等学校解説において、「英語に触れる機会」と「実際のコミュニケーションの場面」であることを趣旨とした授業展開であれば、日本語を必要に応じて補助的に使うことも考えられるとある（※35）（※36）。一方、高等学校解説では、生徒の苦手意識を減らそうとし過ぎ、教師が英語で発話した直後に日本語の意味を付け加えるなど、日本語を安易に使ってしまうことは、かえって生徒から英語に触れる機会や実際のコミュニケーションの場を奪い、英語に対する苦手意識から抜け出すことができなくなり、自律的な学習者としての成長を阻害する原因となる可能性があることに十分留意する必要があるとも述べられている（※37）。このことから、2つの場面を設定した。1つ目の場面は教師が英語での発話の直後に日本語で説明する様子を、2つ目の場面は自然なスピードで簡潔な英語の指示を行っている様子を例として挙げ、併せて教師の英語使用が充実するためのアイデアを提示した。

JTEとALTとの場面では、ティーム・ティーチング（以下、TTと略記）がスムーズに行われている場面とそうでない場面を取り上げた。これは、小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックにおいて、「ティーム・ティーチングの成否は、綿密な打ち合わせの有無によることが多く、限られた時間の中で効果的に行うことが望まれる。」（※38）とあることによる。授業の打ち合わせを行うことは小学校に限ったことでなく、どの校種においても重要である。事前に打ち合わせを行うことは、JTEとALTが授業のねらいや流れを共通理解しておくことはもちろんのこと、授業中のお互いの役割や英語での指示などを予め確認したり、整理したりしておくことで、TTをスムーズに進めることが促進され、生徒にとっても授業の流れや内容が理解しやすいものとなり、生徒の「わかった」という実感や授業に安心して臨むことにつながる。今回の動画では、対面で打ち合わせをしている様子を例示している（図2）が、上記ガイドブックでは、指導案の英語版を事前にメールで送付することも一案として紹介されている（※39）。



図2 Planning English Useの画面（一部）

(2) Instruction Checking Questions (ICQs)

このテーマでは、ICQsの説明に加え、いくつかの例を提示した。例えば、「Let's make a pair.」という指示に対して、「Will you work alone or in pairs?」と尋ねることで、指示された英語の内容を英語で理解することを促し、in pairsなどの応答を確認することで、教師は英語での指示が本当に理解されているのかを確認するとともに、生徒とのやり取りを英語で行うことができることを示している。この他にも、教師の指示に対してwhat, how many, whoなどを使った質問をすることで、指示や説明の内容について生徒とやり取りする例（図3）も挙げている。

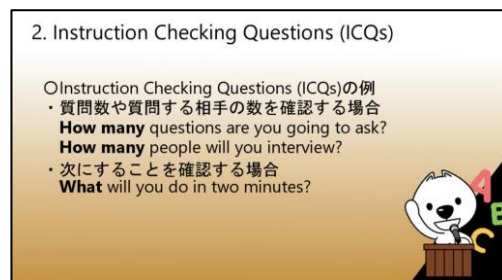


図3 Instruction Checking Questions (ICQs)の画面（一部）

(3) Think-Pair-Share

このテーマでは、Think-Pair-Shareの説明の後、TTでThink-Pair-Shareを活用している場面を示した。動画では、ALTが母国での夏の食べ物やスポーツについて説明した後、JTEが日本の夏の果物の種類について、まずは設定した時間で個人思考し、その後、ペアで話し合うことを指示している。そして、最後にクラス全体で共有している。また、Think-Pair-Shareの方法だけでなく、その効果についても言及した（図4）。

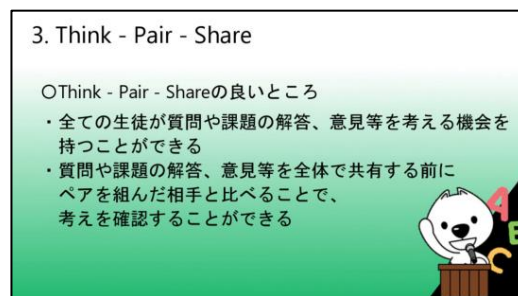


図4 Think-Pair-Shareの画面（一部）

(4) Concept Checking Questions (CCQs)

このテーマでは、CCQsの説明と4つの例を提示した。例えば、「well-known」という語の意味を確認する場合、「well-known」という語を示した上で、「Do we use it (well-known) for people who are famous?」「Do we use it for people who are not popular?」「Do we use it for things that are known by many people?」などの質問を投げかけている。これは、「well-known」という語がどのような人々に対して使われる語であるかという視点の質問をすることで、日本語での訳に頼らずに語の意味を確認している（図5）。

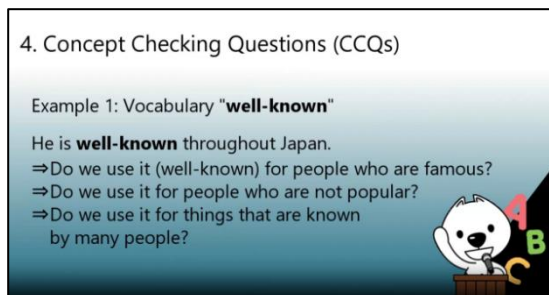


図5 Concept Checking Questions (CCQs)の画面(一部)

(5)Feedback

Dörnyei (2001) は、「成績を除いて生徒の学習行動の中で変化をもたらす最も顕著な役割を果たすものが、教師が授業中や書面で生徒に与えるフィードバックである。」(※40)と述べている。このことから、本テーマでも授業中と書面でのフィードバックを例として取り上げた。フィードバックが効果的なものになるように、その重要性和信頼の気持ちを生徒に伝え、褒めることや改善点についてアドバイスすること(図6)、授業中にフィードバックを行うためにモニタリングすることなどを具体策として示した。

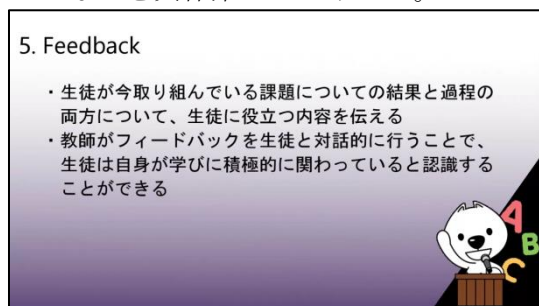


図6 Feedbackの画面(一部)

5 活用と今後の展望

今回作成した外国語教育の動画コンテンツは、当センターウェブページ上でアクセスすることができる(注2)。本動画コンテンツの活用にあたっては、個人の学びだけでなく、校内研修の補助教材として活用することも可能である。また、本動画は中学校及び高等学校外国語科教員に向けて作成したものはあるが、他教科においても学習意欲を高める手立てとして活用が可能であるため、教科を問わず活用されることを期待したい。

今後も、当センターにおいて、生徒の外国語学習への動機づけを高めるための手立てを動画にまとめ、外国語科教員の教育活動を支援し、生徒の英語力向上に寄与したい。

<注 釈>

注1 中学校解説によると、「生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにする」ことについて、次のように述べられている。

教師の英語使用にあたっては、挨拶や指示を英語で伝える教室英語を使用するだけでなく、説明や発問、課題の提示などを生徒の分かる英語で話し掛けることが必要である。また、発話の速度や明瞭さを調整するとともに、使う語句や文などをより平易なもので言い直したり、繰り返したり具体的な例を提示したりするなどの工夫をする必要がある。さらに、既習の言語材料を用いながら教科書の内容を説明したり生徒とのやり取りを行ったりすることで、教師の使用する英語は生徒にとって効果的なインプットとなる。

また、高等学校解説では、「生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにする」ことについて、次のように述べられている。

教師の英語使用にあたり、挨拶や指示を英語で伝える教室英語を使用するだけではなく、説明や発問、課題の提示などを生徒の分かる英語で話し掛けることから始め、徐々に新出の語彙なども入れていくような段階を踏みながら、授業全体が実際のコミュニケーションの場となるようにすることが必要であり、教師がただ英語を使って授業を行えばよいということではないことに注意が必要である。さらに、既習の言語材料を用いながら教科書の内容を説明したり生徒とのやり取りを行ったりすることで、教師の使用する英語は生徒にとって効果的なインプットとなる。

注2 和歌山県教育センター学びの丘ウェブページには、外国語教育に関するコンテンツを掲載している。<http://www.manabi.wakayama-c.ed.jp/gaikokugo/gaikokugo.html>

<引用文献>

- ※1 文部科学省『令和4年度英語教育実施状況調査概要』 p.22 (2023)
- ※2 文部科学省『前掲書※1』 p.22 (2023)
- ※3 文部科学省『中学校学習指導要領外国語科(平成29年告示)』 p.151 (2017)

- ※4 文部科学省『高等学校学習指導要領外国語科(平成30年告示)』 p.179 (2018)
- ※5 文部科学省『前掲書※1』 p.14 (2023)
- ※6 文部科学省『中学校学習指導要領外国語科(平成29年告示)解説』開隆堂 p.86 (2017)
- ※7 文部科学省『高等学校学習指導要領外国語科(平成30年告示)解説』開隆堂 p.127 (2018)
- ※8 白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店 p.111 (2012)
- ※9 文部科学省『前掲書※3』 p.151 (2017)
- ※10 文部科学省『前掲書※4』 p.179 (2018)
- ※11 ブリティッシュ・カウンシル『English Richな授業づくり』 <https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/english-rich> (参照 2023-05-17)
- ※12 中央教育審議会『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』 p.193 (2016)
- ※13 Zoltán Dörnyei『Motivational Strategies in the Language Classroom』Cambridge University Press p.5 (2001) 筆者翻訳
- ※14 R. C. Gardner『Social Psychology and Second Language Learning The Role of Attitudes and Motivation』Edward Arnold p.8 (1985) 筆者翻訳
- ※15 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei (2020) 訳 鈴木章能・和田玲『外国語学習者エンゲージメントー主体的学びを引き出す英語授業』アルク pp.50-60 (2022)
- ※16 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 pp.51-52 (2022)
- ※17 Carol. S. Dweck『Mindset-Updated Edition: Changing the Way You Think to Fulfill Your Potential』Robinson p.7 (2017)
- ※18 Carol. S. Dweck『前掲書』 p.221 (2017)
- ※19 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.56 (2022)
- ※20 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.57 (2022)
- ※21 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.57 (2022)
- ※22 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.59 (2022)
- ※23 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.59 (2022)
- ※24 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.59 (2022)
- ※25 Angela Duckworth (2016) 訳 神崎朗子『やり抜く力ー人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』ダイヤモンド社 p.70 (2016)
- ※26 Angela Duckworth『前掲書』 p.71 (2016)
- ※27 Angela Duckworth『前掲書』 p.357 (2016)
- ※28 Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.50 (2022)
- ※29 John Hattie Gregory C. R. Yates (2014) 訳 原田信之他『教育効果を可視化する学習科学』北大路書房 p.102 (2020)
- ※30 Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.89 (2001)
- ※31 Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.89 (2001)
- ※32 Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.123 (2001)
- ※33 ブリティッシュ・カウンシル英語教育支援チーム『教師の英語の質を高めるーEnglish Richな授業条件第2回』 https://www.britishcouncil.jp/blog/ees_english-rich_2 (参照 2023-05-17)
- ※34 Anderson, Jason『What to consider when teaching English in large classes』British Council (2016) <https://www.britishcouncil.org/voices-magazine/what-consider-when-teaching-english-large-classes> (参照 2023-05-17) 筆者翻訳
- ※35 文部科学省『前掲書※6』 p.87 (2017)
- ※36 文部科学省『前掲書※7』 p.127 (2018)
- ※37 文部科学省『前掲書※7』 p.127 (2018)
- ※38 文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』旺文社 p.112 (2017)
- ※39 文部科学省『前掲書※38』 p.112 (2017)
- ※40 Zoltán Dörnyei『前掲書』 p.122 (2001)

<参考文献>

- ・柴田義松『ヴィゴツキー入門』寺子屋新書 (2006)
- ・Peter D. MacIntyre Sarah Mercer「Introducing positive psychology to SLA」Adam Mickiewicz University『Studies in Second Language Learning and Teaching Vol.4 No.2』 pp.153-172 (2014)
- ・Sarah Mercer Zoltán Dörnyei『Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms』Cambridge University Press (2020)